昭和十七年三月二日
文部省檢定濟
青年學校 修身及公民科

教科書文庫
4
110
44-1942
2000021677

青年學校教本

修身及公民科
男子五年制本科

一卷

文學博士 綿貫哲雄 指導
大日本青少年團本部編

40541
教科書文庫
4
110
44-1942
20000
21677

教科書文庫
4
110
44-1942
2000021677

青年學校教本

大日本青少年團本部編

広島大学図書
2000021677

資料室
375.9
Da 9

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
21677
圖書

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

昭和十四年五月二十二日

青少年學徒ニ賜ハリタル勅語

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繫リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

大正九年十一月二十二日

皇太子殿下令旨

國運進展ノ基礎ハ青年ノ修養ニ須ツコト多シ諸子能ク内外ノ情勢ニ顧ミ恒ニ其ノ本分ヲ盡シ奮勵協力以テ所期ノ目的ヲ達成スルニ勗メムコトヲ望ム

働きつゝ學ぶ青年諸君のために

よき教本が生まれるやうに

一 青年學校教授及訓練要旨・要目に準據し、その精神を一言一句にも生かさうと努めた。

一 堅實な生活態度と雄心とを養ひ、大國民の理想を鼓吹しようとした。

一 縱に學年を貫き、横に諸學科を連ね、全教授・訓練が一體として效果的なものであるやうにと努めた。

一 一切の記述が講讀の爲のものとしても適當でなければならないといふ普通學科要目の精神は、當然修身及公民科に於ても尊重せらるべきである。

一 卑俗を斥け、深遠有用の理を、親しみ易い、興味深い、洗煉された言葉で記述したいと考へた。

昭和十四年春

綿貫哲雄

青年學校教本　卷一　目次

教育ニ關スル勅語
青少年學徒ニ賜ハリタル勅語
大正九年十一月二十二日皇太子殿下令旨

修身及公民科

第一　我等の郷土……（一）
第二　敬神崇祖……（二）
第三　我が家……（一七）
第四　勞働……（二三）
第五　健康……（三〇）
第六　研究……（三六）
第七　まごころ……（四一）

廣島大學圖書之印

懷かしい郷土

修身及公民科

第一　我等の郷土

一　懷かしい郷土

昭憲皇太后御歌

ふるさとの
春なつかしみ
來て見れば
柳けぶりて
鶯のなく

懷かしいものは故郷である。「故郷母あり秋風の涙」といふ句があるが、故郷は父母のいます所、先祖累代の墳墓の地であり、我等の生まれた所、幼少年時代を過した土地である。ふる里は夢にも忘れられない。

美しい協同生活

我等の中には、父母や祖父母が一生を送つたその郷土に哺み育てられ、墳墓を守り家業を繼ぐものもあれば、新天地を求めて他郷に働く者もあらう。けれども住み馴れゝば、どんな土地でも、すべて懷かしい郷土である。年月を經るにつれて郷土の人々や風習は言ふに及ばず、山川のたゝずまひ、一つの丸木橋、一つの小路も懷かしい。

凡そ相集つて村を作り町を成すは人の性である。人類の歴史は長い年月を經たが、その間、誰一人として自分一人で生活したものはない。持ちつ持たれつ、相倚り相扶けてその生を遂げるのであつて、我等が今日あるのも、父母の限りなき慈愛に因るとは言へ、世の人々、別して郷土の人々のお蔭である。

年中行事

我等の村や町には、古いものもあれば新しいものもある。けれどもどの村や町にしても、初は誰かが開墾したり、切開いたりしてくれたのである。目の前の田畑、市街、道、通、今ではその由來を知る人も少いけれども、凡て先人が苦心し、努力して拓いてくれたのである。我等は路傍の一木一石にも心を留め、先人苦心の跡を尋ねてその偉業を繼ぎ、郷土の發展に全力を捧げねばならない。

二　共に樂しむ喜び

郷土の生活は何となく氣安い。不慮の災難には言ふに及ばず、何事にも人々馳せ參じ相集つて、悲しみを分ち、喜びを共にする。何といふ人情の美しさぞ。

年中行事はいつしかこの美しい生活の中から生まれたのである。それは我等の慰安の日、追懷の日、祈念の日であつて、鄕土の生活に於ける無上の行樂である。

昔の生活は何と言つても農業中心であつたから、年中行事には農事との關係を主としたものが多い。我等にとつて殊に樂しい鎭守の氏神の祭典、その春祭は五穀の豐穰を祈り、秋祭は新穀を捧げるのであつて、それがまた農閑の頃を選んで、互に勞を犒ひ、喜びを分つこととともなつてゐる。また年の始に門松を立て、若水を汲み、屠蘇酌みかはすのも嬉しい。その他春秋彼岸の寺參り、盂蘭盆の靈祭、上巳、端午の節供、仲秋の月見、何れもゆかしい古來の行事である。新しいものには殊に我等青年にとりて意義深い青年記念日などがある。畏くも今上陛下には、大正九年十一月二十二日、當時皇太子殿下におはしましたが、全國青年代表を高輪御所に召さ

鄕土の氣風

せ給ひ、忝い令旨を賜はつた。我等は年々菊花薫るこの日を記念して、種々なる催しをなし、覺悟を新にする。

年中行事には、今では忘れられてゐるがゆかしい意味のこもつたもの、或は殆ど意味のなささうに見えるもので、よく考へて見ると捨て難いものもある。それを再び我等の生活に活かしたい。殊に都會の生活には人情の潤が乏しい。もつとゆかしい鄕土の香がほしい。

三　鄕土の氣風

人にはそれ〴〵人柄といふものがある。人柄は長い年月の間に自然と作られるのであつて、この點で殊に大切なのが村や町の氣風である。「霧路を行くものは衣を濕さずと雖も潤あり。」といふ言葉があるが、鄕土の氣風が質朴であれば我等も質朴、平和であれ

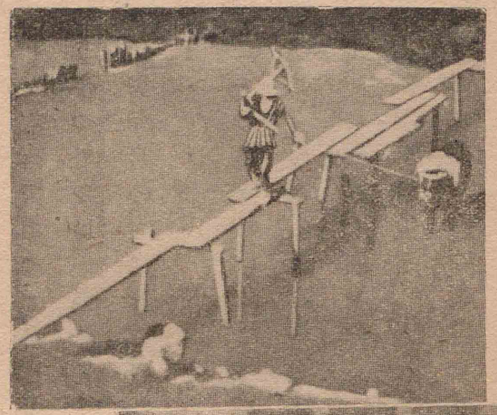
ば我等の心も自ら和ぐ。また深山の草木の色の鮮かなのは、空氣が清らかであるからであつて、我等が清らかであるためには、鄉土の氣風が醇美でなければならない。

家に家風があるやうに、鄉土には鄉土の氣風がある。それには美風もあれば陋習もあらう。殊に近年交通の發達につれて、よからぬ種々の風潮も押し寄せて來る。陋習には泥み易く、美風には馴れ難い。常に深く省み、相戒めて、醇風を興し、美俗を養はねばならない。これぞ我等の子孫への美しい遺産ではないか。

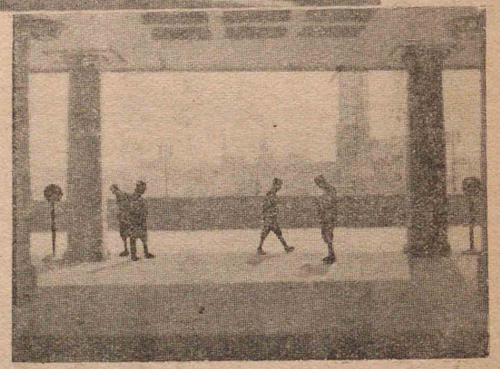
鄉土愛

四　鄉土愛

鄉土は先づ我等の村であり、町である。しかしこれを日本全體から見れば府縣も鄉土で、更に世界全體から見れば祖國も鄉土である。我等の村や町が立派になれば、府縣も國も榮えて行く。愛鄉は愛國である。愛鄉の念に燃える我等の一鍬一鎚には、愛國の響を聽く。



水邊スケッチ



東京上野驛の朝

されどいかに鄉土を愛すればとて、徒に自慢をしたり他鄉の人人を嫌つたりするやうな偏狹であつてはならない。また情熱にのみ驅られ、冷靜な研究を怠つて、皮相な鄉土愛に流れるやうなことがあつてはならない。

農漁村と都市

我等の中には、農村や漁村に暮してゐるものもあれば、都市に生活してゐるものもあらう。村は昔は山麓や谷間などに自然に發達した部落であつて、概ね血緣のつながりがあり、住民は互によく知り合つてゐた。慶弔は言ふに及ばず、何くれとなく互に扶け合つた。今日の村は維新後に定められた自治行政の區劃で、昔の村のまゝではない。しかしその隣保相親しむの風には都會では見ることの出來ない味はひがある。さん〳〵と降りそゝぐ陽光を浴び、充ち溢るる新鮮な空氣を吸ふ。或は土に親しみ、土を耕し、又は海中に無盡の寶を探る。厚き自然の恩寵を讃へねばならない。然るに都市の生活は活潑で、便利で、華やかである。學校・圖書館・病院もあれば、映畫館・劇場もある。近代文明の恩惠を恣にしてゐる。

けれどもこれ等の半面には幾多の病弊がある。即ち農漁村の平和の生活にも、啻に教養・娯樂の施設が乏しいばかりでなく、近年疲弊の聲を聞く。また都會の華やかな生活にも、その陰に現代文明のあらゆる病弊が潜んでゐる。されば農漁村に於ても、都市に於ても、病弊の根源を究めて、これを除くことに力めねばならない。

農村、都市、何れも我等の大切な鄕土であつて、しかも緊密な相互依存の關係にある。例へば兩者は、互に生産地であり、消費地である。食料・工業原料品等では農漁村が生産地、都市が消費地であるが、工業製品では都市が生産地、農漁村が消費地である。だから農漁村が豐かになれば、購買力を增して都市を潤し、都市が繁昌すれば、農漁村も自然に活況を呈して來る。乃ち國中の村々町々が競うて隆盛に向かふ時、はじめて我が村我が町の繁榮は望まれるのである。

青年の使命

あゝ鄕土！　その風物と人の懷かしさよ。愛鄕の情に我が胸は躍る。徒に他鄕を羨むなかれ。我が鄕土を守り、これをより善

くより美しいものに歩々建設しゆくは、我等青年の輝かしい使命ではないか。

〔課題〕

一　郷土の先人の遺業とその由來を探れ。

二　郷土の年中行事を擧げその由來を探れ。その精神を活かしてゆきたいと思ふのはどんな點か。

三　郷土の美風陋習を擧げ、氣風刷新の方法を考へよ。

四　我が郷土の振興策を考へよ。

第二　敬神崇祖

一　朝夕のつとめ

朝夕のつとめ

敬神崇祖は我が國古來の尊い國風である。我が國では、全國津津浦々に至るまで、皇大神宮大麻を奉祀し、また先祖代々の靈を祀つてゐる。神棚・佛壇は家の最も神聖な處で、朝夕の御飯や、不時の到來物なども、先づ之に供へてからでなければ口にしない。四季折々には、花・果物・初穗などを供へて、神を尊び、祖先の靈を慰める。神事佛事は一家の最も重い行事である。家に事あれば先づ之を神佛に告げるのである。

古語に曰く、「君子生ける時は則ち敬養し、死せる時は則ち敬享す。」と。父母います時はよくこれに事へ、死しては篤く之を祭る。美

しい我等の至情である。御位牌の前に立つ時、眼に浮かぶものは、在りし日の父母の慈顏や、亡き兄弟姉妹の懷かしい姿である。それ等は今や神聖な世界に在つて、目に見えぬ力で我等を護り、勵ましてくれる。朝に神棚・佛壇を清めて祈念をこめれば、心も清々し

明治神宮

氏神

い。いざ勇躍して仕事に就かう。一日の業務は終へた。夕に感謝を捧げ、明日もまた幸多かれと祈るのである。

郷土の生活の中心は氏神である。氏神は氏族の祖神、または氏族に縁故の深い神が郷土の鎭守として祀られたのである。郷土が發達するに連れて、異なる氏の人々が入り込んで來る。それ等の人々の子孫にとつては、氏神は自分達の生まれた土地の神、卽ち産土神である。けれども朝夕相親しみつゝ、年所を經るにつれて、いつしか人々は凡て氏神の氏子となつた。氏神の祭の日は何よりも樂しい。この日、親戚故舊を招いて交情を溫める。倦むことなく業務に精勵して來た我等にとつては、この上ない慰安である。

御宮參りの風習は、今も廣く行はれてゐる。御宮參りをして子供ははじめて氏子の列に加へられる。氏神氏子の關係は、親と子、先祖と子孫の間柄である。我等の相集つて村や町を成すところ、

そこには必ず氏神がある。新しく村を作り、或は海外に新天地を拓くや、必ず先づ神社を造營し、或は故郷の氏神の分靈を祀る。

二　神社と祭祀

神社

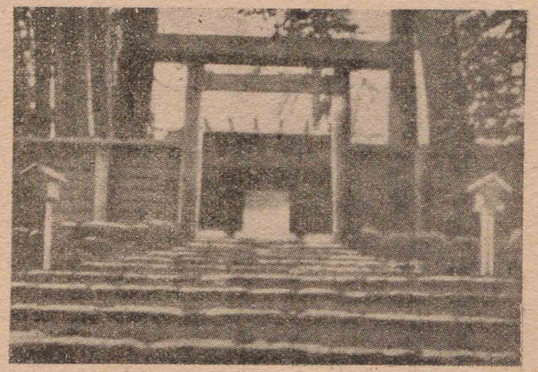
大日本は神國なり。天祖はじめて基を開き、日神ながく統を傳へ給ふ。わが國のみこの事あり。異朝にはその類なし。

この故に神國といふなり。　神皇正統記

我が國は神の定め給ひし國、神の加護の下に彌榮えゆく國である。神代の昔から、神を祭るは國の大事、祭事は政事であつた。我等の先祖は、古くは清淨の地に石を積み廻らし、神籬を立て、後には社殿を造營して、皇祖皇宗、歷代の功臣、氏族の祖先、國民的または地方的功勞者、殊に皇國の爲に戰つて斃れた忠勇義烈の人々等の靈を祀つた。神社と國家、神社と國民とは離れることが出來ない。

神社は國民擧つてこれを仰ぎ、これを尊崇する。

神社には、官幣社・國幣社・別格官幣社・府縣社・鄕社・村社等の格式の別がある。之を社格といふ。天皇は、皇大神宮並びに宮中三殿を奉齋せられ、國民に範を垂れさせ給ふ。神宮には天照大神並びに豐受大神を祀る。宮中三殿は、賢所・皇靈殿・神殿であつて、賢所には天照大神、皇靈殿には歷代天皇及び皇族の御神靈を祀り、神殿には天神地祇を祀る。神社には例祭がある。祭は神に順從ふ意で、神社への奉仕である。神武天皇は皇祖天照大神を鳥見山に祀り給ひ、崇神天皇は神器を笠縫の邑に奉じて皇祖を



皇大神宮

祀り給うた。古來朝廷を始とし、國民みな祭を最も重しとした。

明治天皇御製

わが國は神のすゑなり神祭る
昔の手ぶり忘るなよゆめ

一つの神事と雖もおろそかにしてはならない。心をこめ、まことを盡くして、常に深く神を敬ひ、篤く之を祀らねばならない。神社の境内が、いつも塵ひとつないやうな村や町は、必ず平和であると云はれてゐる。また祭典は人々の心を和げ樂しくする。常に神に仕へる清らかな心、祭の時の和いだ心さへあれば、村にも町にも、平和な風が吹いて、皇國は榮光に輝くであらう。

〔課題〕

一　郷土の神社の縁起由來を調べよ。

二　敬神崇祖に就いて各自の日常を省みよ。

第三　我が家

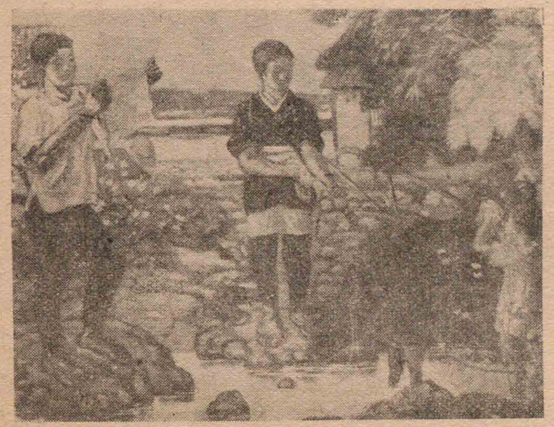
一　家庭愛

人生の樂園

「むつとして戻れば庭に柳哉」生活のために働き、或は處世意の如くならず、心身困憊するも一度我が家の春風にあへば、忽ちにして疲れ、憂ひ、悲しみも消えて、生氣油然として湧く。明日もまた果敢に働かう。家庭は人生の本據にして、またこの世の樂園である。もし一家の和樂を味はひ得ないとすれば、人生の不幸之に過ぎたるはない。我等は樂しい家庭の建設に力めねばならない。家庭の生活は人間自然の愛情から湧いたもので、虚僞も虚飾もない。家族に對する心持をおし廣めて世人に接することが出來たならば、世の中はどんなに樂しくなるであらう。

社會人の搖籃

家庭は社會人の搖籃である。



春の夕

怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり。面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を樂しくす。面はずして愛語を聞くは肝に銘じ、魂に銘ず。愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。

道元

愛語とは、人に接して先づ慈愛の心を起し、情愛のこもつた言葉を發することをいふ。

また利休は和敬清寂を說いた。和とは和合、敬とは己を慎み他を敬ふ心、清とは物と心の清らかさ、寂とは心のおちつきであつて、これ等が形に現れたのが精行儉德である。精行とは一々の動作に心がこもることで、その結果として何となく感謝したいやうな氣持になるのが儉德である。

愛語と儉德とは、社會人として最も大切な美德である。愛語には敵をも變じて友となす不思議な力がある。儉德ほどゆかしいものはない。しかるにそれ等は專ら家庭で養はれるのである。

家庭愛

親は我を生み、我を育て、その身を忘れて、我等のために幸多かれとのみ祈るのである。また我等が身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げようとするのも一に父母を慰めんがためである。親子は實に一連の生命であつて、孝は百行の本、人倫の大本である。殊に我等國民は皇室を宗家と仰ぎ奉り、孝は卽ち皇室に對する忠となる。忠孝一本は、たゞ我が國に於てのみ之を見る。

愛の榮え

二　家の榮え

河水晝夜に流る。家は祖先より子孫に連なる一系の流で、その成員は新陳代謝するけれども、家そのものは不變である。破れた垣、朽ちた緣、使ひふるされた諸道具など、凡てが我等を家に結びつけてゐる。祖先の靈が我等を護つてゐる。

昔、武士は戰場で、家系を誇り、名乘りを擧げた。我等にも此の覺悟はある。一人の名譽は一家の榮譽、一人の汚名は一家の恥辱である。「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」これは菅原道眞の元服の時、その母の詠じた歌である。家風を興し、家名を揚げねばならない。我が家には誇るべきものもないかも知れない。また人の家には浮き沈みもあらう。けれどもこの覺悟を常に忘れてはならない。

家の經濟

「倉廩實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る。」家の經濟の基礎が安固であれば、一家の生計を維持し、祖先の祭を營み、子女を敎育することが出來るばかりでなく、また禮節を解し榮辱を知る。一國の富强また之に基づく。

家計の原則は、入るを計つて出づるを制するにある。この原則に基づき、豫算を立て、また記帳を精密にせねばならない。一家和合し、力を協せ、生業に勵んで、節約を圖り、增收に力めねばならない。餘裕あれば貯蓄に心掛け、また不時の用意に保險をかけるのもよい。保險は相互扶助の精神が生んだ制度であつて、生計の豐かでないものは、之に依つて益する所が殊に多い。のみならずそれは他人をも救ふこととなり、國を富ます所以でもある。

昭憲皇太后御歌

もつひとのこゝろによりてたからとも

あたともなるはこがねなりけり

賢者は用の財を作るを樂しみ、愚者は不用の財を貪るに勞す。財の尊いのはその活用にある。家は漏らぬ程、食は饑ゑぬ程で事足るのである。狹くさゝやかな家でも、淸く快く住みなして、「高い人生」を樂しまうではないか。

〔課題〕

一　樂しき家庭の建設には、どんな心の修養が大切か。

二　家庭生活で社會人を養ふ上に、改善を要する諸點を考へよ。

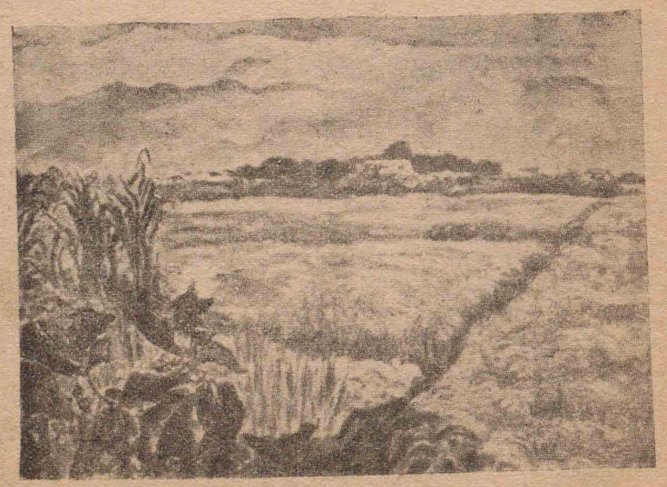
三　國の財政の原則と家計の原則の相違を考へよ。

四　何を節約し、いかに增收をはかるべきか。

第四　勞働

口には朝の息を吹き
骨には若き血を纏ひ
胸には誇、手に力
霜葉を踏みて疾く來れ

野に出でよ、野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結へ、鎌も取れ
風に嘶く馬もやれ



銃後のみのり

一　勞働の尊さ

働け！　働け！　蜂も蝶もみな仕事を持つてゐる。　歡びに溢れて働いてゐる。　されど勞働は慰みごとではない。

フランスの畫家ミレイは、田園に退いて農民の勞苦を描き、幾多の名作を遺した。　彼は言つた。　額に汗して生きること、あれがどうして慰み半分なものと言はれよう。　勞働こそ眞の人生である。偉大な詩であると。

一粒の米の重きこと須彌山の如し。　それが實るまでには、百姓がどれだけ勞苦したか知れない。　たゞ手を動かしただけでない。また鋤や鍬や、その他さまざまの道具を使つてゐる。　この道具を作つたのは誰か。　更にその鋤鍬の材料となつてゐる鐵や木は、どこから誰が取つて來たのか。　かう考へて來ると、一粒の米の中にも、實に何千何萬といふ人々の骨折がこもつてゐる。

二宮尊德は、世情騷然、仕事も手につかなかつた時代に默々として一意農耕に勵めよと訓へた。　眞に國を思ふものは徒に空理空論を事とすべきでない。　しつかりと大地を踏みしめて、天惠を人力で取出すのが我等人間の務である。「自然」に我等の勞力を加へて、新しいものを產み出すのは、天地の化育に參する所以である。

勞働は單に金錢を得てその日その日の生計を立てるだけのものでない。　我等の今日の生活は、凡

て世の人々の勤勞のお蔭である。この着物はどこで作られたか、この家は誰が建てたか、かの橋は誰が架けたか。我等はこの恩德に報いねばならない。或は我に財あり、遊んでゐても暮せると云ふかも知れない。されど百丈禪師は言つた。「一日作さざれば一日食はず。」と。勤勞は人の道である。富めるも貧しきも凡て働かねばならない。

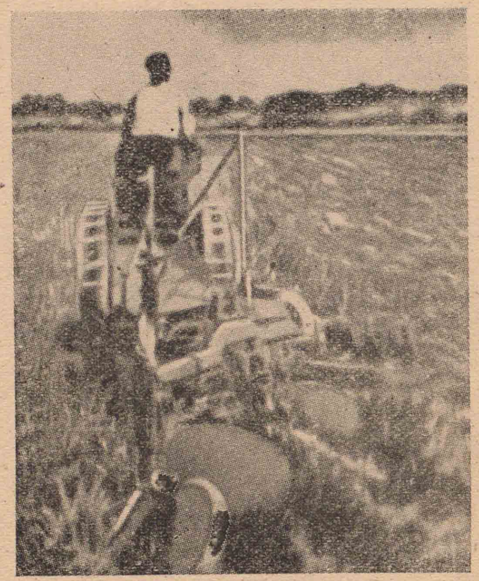
働くものの喜び

二　働くものの喜び

狹い家、小さな畑、貧しい暮し
けれども
樂しい兄弟、丈夫な身體、平和な心
これほど偉大な人間があらうか。

かやうに歌ひつゝ、一人の詩人は、貧苦と闘ひながら眞劍に勞働しつゞけた。精一杯に働け。仕事の後のこゝろよい疲れ。貧しい中にも湧き出る尊い歡びがある。

働かざることの寂しさ



「働かうとして職なきは、人生の悲慘事中、その最大なるものなり。」これ曠野れイギリスの思想家カーライルの言である。拓を仰いで天行の健なるを見よ、活動は宇宙の大則である。或は鐵鎚を振り上げて地を掘り石を割り、或は霜を踏んで出で星を戴いて歸る。或は油に塗れて機械を操縦し、或は誠實慇懃を盡くして顧客に接す。この時、我獨り爲

すなくして徒食する、何といふ寂しいことぞ。

明治天皇御製

おのがじしつとめを終へし後にこそ
花の蔭にはたつべかりけれ

働け！　一人も殘らず働け！　昔は勞働を賤しんで、働かないことを自慢のやうに思ふものもあつた。今でもなほこの弊を脱し得ないものがないとは云へない。恥づべきである。イギリスの政治家グラッドストーンは、「我は勞苦に最大の幸福を發見した。自分は若い時分に勉强の習慣を養はれたが、この事が勉强に對する立派な報酬であつた。」と言つた。仕事は人間を尊くする。また古語に曰く「小人閑居して不善をなす。」と。水流るれば常に清し。人閑居して不善に陷る。また彼のミレイは言つた。「私はたゞ働けと忠言するのみである。皆が皆天才になることは不可能であるかも知れない。けれども皆が皆仕事をすることは可能である。どんな天才でも仕事をしなければ何にもならない。」と。またドイツの宰相ビスマルクは言つた。「青年に勸めるたゞ三つの言葉がある。曰く働け、働け、働け。」

我等働くもの

默々として我が職場を守り、日夜勞苦して生業に勵む我等青年こそ、實に皇國の前途を擔ふものではないか。職業に貴賤なし。徒に他人の仕事を羨むなかれ。たゞ一日一日を眞劍に働かう。

〔課題〕

一　勞働の苦しみがいかにして勞働の喜びとなるか。

二　詩に歌に文に或は繪に、勞働を讃へよ。

第五　健　康

一　健康の尊さ

健康の尊さ

健康は凡ての活動の根源である。我等は未來に輝かしい希望を抱き、また前途に重大な使命をもつてゐる。だから身體を丈夫にせねばならない。殊にこの青春の時代を逸しては、身體を鍛錬して健康の基を作ることが出來ない。鐵は熱してゐる間に鍛へねばならない。

健康に惠まれた人ほど仕合はせなものはない。健康でさへあれば、艱難と戰ひ、志を遂げることも出來る。病弱では、いかに有爲の材であつても、半途にして挫折する。父母の最も心配するのはその子の健康である。我が身であるからと言うて粗末にしては

國民保健

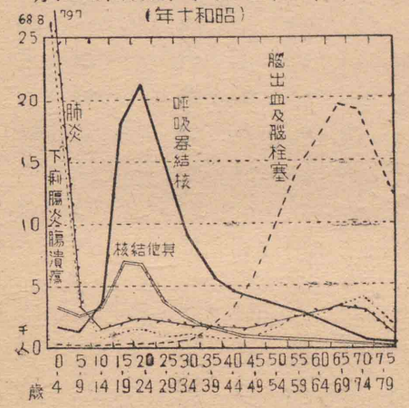
ならない。我等は青年の元氣に任せて、動もすれば健康に注意しない。また恩狎るれば感ぜずといふやうに、丈夫である間は健康の有難さを知らない。一旦病の床に呻吟するに及んでは健康の幸福に氣附く。けれども既に遲い。平素から意を用ひねばならない。

身體が健康でなければ、不撓不屈の氣象、穩健中正の精神を持つことが出來ない。また氣分にむらがあり、苦情が多かつたりして、明朗闊達でない。精神が健全であれば、攝生を守り、身體に注意するから、自ら健康となる。健全な精神は健全な身體に宿り、健全な身體は健全な精神から生まれる。

二　國民保健

我等の健康は單に一人一家の幸不幸の問題でない。實に國家

の盛衰に懸るのである。國民が虛弱であつては國家の發展は思ひもよらず、一旦緩急の際、國難を克服することが出來ない。且我等の健康不健康は子孫に影響して、次代の國民を強くもし弱くもする。心すべきである。



（日本國勢圖會による）

我が國民の體位は、近年次第に低下すると云はれてゐる。これを世界列强に比するに、平均壽命は十年乃至二十年も短く、結核死亡は驚くべき高率で、特に青年に於て著しい。また乳兒幼兒の死亡率の高いこと、トラコーマ、赤痢、チフス患者等の今なほ多いこと、寄生虫患者が農民の八割をも占めてゐること等、何れも一等國と

して恥づべきである。我が國の前途にとつて寒心に堪へない。我等は深くこの點に省みて、先づ各自の健康に一層留意すると共に、大いに公衆衞生を重視せねばならない。或は道路・河水に汚物を棄て、或は傳染病の發生を祕するなど、公衆衞生道德の幼稚であるのは、文明國民として恥づべきではないか。更に國民が「絶えず、正しく、普く」體育を實行して體位の向上を圖らねばならない。而して體位向上の努力は、國民の眞の自覺から湧き出るものであつて、はじめて實績を擧げ得るのである。我等青年はこの國民的運動の先頭に立たう。

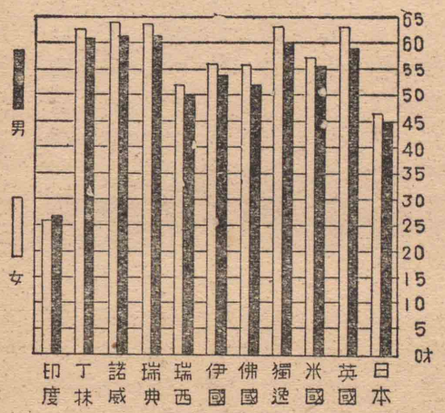
職業と保健

健康增進はそれ〴〵の職業に應じて工夫すべきである。田舍では空氣のよい戸外で働くから概して健康である。併し農村青年の健康に就いても、近年寒心に堪へないものがある。衞生知識の不足、健康に對する無關心等の結果であらう。天惠に狎れては

健康の增進

ならない。都會では、塵埃が多く、戸内で働くので健康を害し易い。だから力めて新鮮な空氣を吸ひ、日光に浴して運動するやうに心掛けねばならない。また一つの職業に長年從事してゐると、身體發育の均齊が失はれたり、謂はゆる職業病に冒されたりする。之を調節する適切な運動法を講ずることが肝要である。

列國人の平均壽命



いかにして我等の健康を增進すべきか。第一に攝生を守らねばならない。とりわけ暴飲・暴食・夜ふかし等を愼まねばならない。飲酒・喫煙は有害なるのみならず國法の禁ずる所である。更に大いに身體を鍛錬せねばならない。

その境遇に應じた適當な機會と方法を見出して之を活用することに力めねばならない。偉大な事業を成し遂げた人は、多くは青年時代に大いに身體を鍛錬した。我等の間には、或は不幸にして生來蒲柳であり、又は不慮の病に惱むものもあらう。併し決して失望してはならない。貝原益軒は幼い頃極めて虛弱であつたが、攝生と鍛錬に依り、齡八十を過ぎ、なほ氣力旺盛であつて、大なる仕事を成し遂げたのである。

〔課題〕

一　國民保健に對して厚生省はいかなることをなす所であるか。

二　公衆衞生道德に就いて氣のついたことを擧げよ。

三　鄕土の健康の實狀を調べ、健康增進の方法を考へよ。

四　いかにして各自の健康を增進すべきか。

獨創の喜び

第六　研究

一　研究心

眞理を求めてかうでもないあゝでもないと、どこまでも探り究めて行くのが人間の尊さである。動物は習性のまゝに日々同じやうな生活を繰返してゐるから進歩がない。人間は工夫し研究する。その結果常に生活を變へ、歷史を作る。我等も何等かの意義ある足跡を歷史に殘さねばならない。

ドイツの文豪ゲーテは言つた

「神樣が眞理の玉と研究心の玉とを兩手に持つて、どちらか欲しい方をあげようと仰しやるなら、私は研究心の玉の方を頂きたい。研究心は眞理を發見する手段に過ぎない。けれども眞理の玉を初から頂いてしまつては、研究の結果之を發見するといふ人間最高の樂しみを味はふことが出來ない。」

と。工夫を凝らし、研究を積み、遂に成功した時、その成功がどんなに小さなものであらうとも、大聲を擧げ、雀躍せずにはをられない。獨創は人間最高の歡びである。

新しいものが世界に生まれて來るほど喜ばしいことはない。太古草昧の世、火を發見して之を利用し、農耕の法を工夫して食物を得、纖維を織つて衣服に充て、降つては印刷術、蒸氣機關近くは飛行機を發明して之を人生に利用するに至つたことが、いかに人類の生活を幸福にしたか。燦然たる現代の文化は、かゝる發明發見で築きあげられた一大金字塔である。

二　發明發見

發明發見

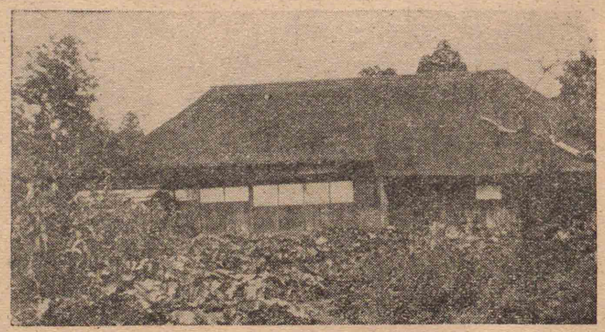
野口英世

古來偉大な發明發見を成し遂げた人々の傳記は、一つの發明も實に慘澹たる苦心の結果であることを物語つてゐる。發明王エヂソンは研究に沒頭すると、時間も食事も忘れてしまふ。全精神は唯一點に集注し、頭腦は神の如く働き出す。電燈・活動寫眞・蓄音機、その他數へ切れない大發明が、かゝる辛苦の幾十年から生まれたのである。彼は初等教育さへも卒へてゐない。獨學で勉强したのである。また我が野口英世博士が貧家に生まれ、苦學研鑽、大きな仕事をして不朽の名を世界に殘し、終に研究の犧牲となつてアフリカの旅先で黃熱病に斃れるまでの生涯は、同じく尊い辛苦の歷史である。

青年の創意

二　青年と研究

青年は創意に富み、研究心が旺盛である。創意と研究心は之を青年の時期に愛育しなかつたならば、終に伸びずして萎むであらう。されば我等は先づ何等か一つの題目を選び、常にこれに向かつて專心研究の歩を進めて行かう。これが普く全國の青年によつて實行せられるならば、必ずやその成果が現れて、生活の改善、地方の產業の振興は言ふまでもなく、國運の發展にも貢獻し得るであらう。かゝる「一人一研究」に



野口英世の生家

より或は山間地に於ける稻作を研究して冷害による凶作の克服に成功し、或は櫻桃の新害虫を發見して廣く世界の學界に認められ、或は摩擦音響增幅器の世界的發明をしたものもある。これ等は日本勤勞青年の誇である。發明發見は必ずしも學者・專門家を俟たない。職業に對する研究は我等の日々を樂しくするのみでなく、またかやうに世を裨益する。

協同研究

多數のものが協同して一つの事柄を研究するのは一層望ましい。協同の力は偉大である。曾て北海道に稻熱病が發生した時、二萬七千餘戸の農家が一致して、農事試驗場の研究に協力し、遂にこれが驅除に成功した。我等は率先して協同研究に當らうではないか。

工夫

偉大な發明發見が國家・社會の福祉を增進することは言ふまでもない。けれども一見平凡な工夫が人類の幸福を齎すことを見遁してはならない。我等が今日安らかに衣食することが出來るのも祖先が工夫に工夫を重ねて來たからである。一椀の食、一枚の衣にも、先人の苦心を偲ばねばならない。大きな研究發明は固より望ましいことであるけれども、我等は先づ日常卑近な事物に就いて、絶えず工夫を凝らすがよい。注意深い眼を以てすれば、田畑・工場・店舗、至る所に我等の工夫を待つものがある。ふとした機會が緒となり、大きな發明發見となることもあらう。失敗は成功の母である。百折屈せず、工夫研究をしてゆく勇氣が欲しい。

〔課題〕

一　工夫に成功した時の經驗を述べよ。

二　「必要は發見の母」とはいかなる意味か。

三　「一人一研究」をせよ。

四　記錄は凡ての研究の基である。力めてその習慣を養へ。

第七　まごころ

一　天に事へる心

およそ事をなすには、須く天に事ふるの心あるを要すべし。人に示すの念あるを要せず。

佐藤一齋

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡くし、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

西郷南洲

罌粟の實は小さいけれどもその中に言はば一つの誠がある。奪ふべからず、隱すべからず、昧ますべからず、覆ふべからず、時到れば芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。四季の次第や日月の運行は、いさゝかの弛みもなく僞りもなく萬古不易である。古人は之を天理と言ひ、また誠と言つた。

然るに人間は名譽や利益で動いてゐることが多い。だから世間の評判や思惑にばかり拘つてゐると、僞りを言ひ、或は外面を飾り、終に誠を失ふやうになる。されば誠を身に得るには、何事を爲すにもたゞ天に事へることを念とせねばならない。胸に手を當てて考へ、耳を澄まして聽けば、誰にも俯仰天地に愧ぢない心がある。この心に從つて行動する事が卽ち天に事へる所以である。誠の德具はれば、光風霽月、心廣く體胖かに「肱を曲げてこれを枕とするも樂しみまたその中にあり。」といふべきである。

我が國では古來眞言は眞事である。言へば必ず之を行ふ。實行出來ない事は猥りに言はない。之がまことである。それはまた明かき淨き直き心であつて、我が國民性の根本をなして來た。

諸德の源

誠は一切の德の根源である。心にまことあれば、時、處、地位に應じて、或は忠となり、孝となり、和信となり、樣樣な美德となつてそれが現れる。明治天皇は軍人に賜はつた勅諭に於て、忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五德を示し給ひ「之を行はんには一の誠心こそ大切なれ」「心誠ならされは如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つへき。心たに誠

江戸開城談判

不思議な力

あれは何事も成るものそかし」と仰せられた。

二　至誠神に通ず

「天は正義に與し、神は至誠に感ず。」まごころは必ず神に通ずる。孟子は「至誠にして動かさざるもの未だこれあらざるなり。」と言つた。まごころには不思議な力がある。西鄕隆盛は至誠の人であつた。見よ、その眼に溢るるまごころを。眞實の一語で江戸城の明渡しは完うされた。道眞の遺德千載に芳はしく、楠氏の精忠萬世に輝く。天下後世をして感奮興起せしめるものは、たゞ誠である。

明治天皇御製

きくにまづ身にぞしみける誠より
いふことのはゝ長からねども

誠の工夫

名もない人の一心が世人を動かした事は少くない。眞實をこめて書き綴つた技巧のない文章が、却つて人の胸を打つではないか。誠意の乏しいものが、たとひ一時名利をかち得ても我等は天を疑つてはならない。世の輕佻浮薄はもとより憂ふべきであるが、人心に至誠を缺き、また至誠の感激に乏しいほど歎かはしきはない。

ある朝、曉の鐘が嚴かにも貴く響き渡つた。住持は心耳を澄まして聽いてゐた。やがて新參の小沙彌を招き、どんな心持で撞いたのであるかと尋ねた。たゞ鐘を佛と心得て撞いたばかりであると答へた。凡そ誠を身に得ようとするものは、第一にこの眞劍の心がなければならない。また昔、楊震は、暮夜知る者なしとて賂しようとしたものがあつた時「天知る、地知る、我知る、子知る。」とて受けなかつた。之を楊震の四知と云ふ。卽ち第二に獨りを愼まねばならない。また古語に「誠は善を擇び、固く之を執るなり。」とある如く、第三に明らかに善惡を辨へ、第四に敢へて善を行ふの勇を養はねばならない。

純眞は我等青年の誇である。常にこの誇を誇として至誠一貫世に處して行かう。互に相勵まし相戒めて、天を敬ひ神に事へ、胸一杯のこのまごころで何事にも當つて行かう。

〔課題〕

一　心だにまことの道にかなひなば
　　祈らずとても神やまもらむ
　この歌の意味を考へよ。

二　人のまごころに動かされた經驗を述べよ。

三　「まごころは處世の根本なり。」とはいかなる意味か。

昭和十三年十二月廿五日印刷
昭和十四年一月一日發行
昭和十五年二月十二日修正發行
昭和十七年二月廿五日修正再版發行
昭和十七年二月廿五日印刷

定價一冊　卷一　金拾五錢
卷二、三、四、五　金貳拾錢

編者　大日本青少年團本部
代表者　朝比奈策太郎

發行兼印刷者　東京市四谷區霞ヶ丘町一一
財團法人　日本青年館
代表者　朝比奈策太郎

印刷所　東京市小石川區久堅町一〇八
共同印刷株式會社

發行所　東京市四谷區霞ヶ丘町一一
財團法人　日本青年館
電話青山四二六〇—四番
振替　東京六〇七七八番

青年學校教本

沼田青年学校
第二学年
青尾用

広島大学図書
2000021677